河川基金助成 学校部門

令和7年度助成
今秋
募集開始
!!

学校部門助成額 10万円～50万円

小学校・中学校・高等学校・中等教育学校・特別支援学校を支援します！

河川教育
- ●川や水を題材・教材とした学習（地域の防災、環境、暮らし等）
- ●川や水に関連した総合的な学習、教科学習（全ての教科）等

を支援します。

小学校・中学校・義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校等に対する助成では、教科学習や総合的な学習の時間などにおける「河川教育の実践」を支援しています。

河川教育の準備　河川基金とりくみ支援

河川教育の実践を目指す学校の準備活動を支援します

■準備活動／助成活用例
- ●河川教育を実践している学校の視察　／旅費・交通費
- ●教員を対象とした河川教育指導のための研修　／研修費用
- ●河川財団主催の「河川教育研究交流会」等参加費用　／旅費・交通費
- ●川や水辺での体験活動の試行　／器具や備品の購入費

助成（活動）期間：1年間（春の募集 約10か月）　助成額：10万円まで

河川教育の実践　単学年

教科学習、総合的な学習等における単学年、または複式学級における河川教育の実践

助成（活動）期間：1年間
助成額：20万円まで

河川教育の実践　複数学年

教科学習、総合的な学習等における複数学年（学年数が2つ以上）の河川教育の実践

助成（活動）期間：1年間

複数学年（学年数2～3）	複数学年（学年数4～6）
助成額：40万円まで	助成額：50万円まで

※令和5年度より、複数学年での助成は実践する学年数に応じた助成区分に変更いたしました。

審査にあたって　川や水を題材・教材とした学習、あるいは川や水辺を体験の場とする学習活動を通して育成したい「子どもの姿」「子どもの力」が、具体的に示されていることを重視しています。

河川教育研究交流会　河川教育研究交流会は河川財団が主催する全国規模の情報交換の場です。
河川基金助成事業で実施した活動内容を発表いただきます。
優秀な成果を表彰し、学校での河川教育活動を応援します。

お問い合わせ
公益財団法人 河川財団
基金事業部
電話 03-5847-8303　E-mail:kikin-toi@kasen.or.jp
〒103-0001　東京都中央区日本橋小伝馬町11-9 住友生命日本橋小伝馬町ビル2階
河川財団ホームページ　https://www.kasen.or.jp

河川基金

河川教育とりくみ支援

川や水を題材・教材に総合的な学習、探究的な学習にとりくむ準備や活動を応援する助成金です。

河川基金助成
令和6年度【学校部門】

小・中・高校等、学校教育における川や水にかかわる探究的な学習活動に助成し、子どもたちの生きる力の育成を支援します。

川や水には、環境、防災、地域の暮らし・歴史・文化など学習に活かすことができる要素がたくさん存在しています。河川基金では教科学習や総合的な学習の時間において、川や水を題材・教材とした学習や川や水辺の体験学習に助成しています。

新学期・新学年から間に合う！
春の募集
助成額 10万円

募集期間　令和6年4月1日（月）～30日（火）

応募方法　募集要項等、河川基金の詳細はHPをご覧ください。

河川基金Webサイト
https://www.kasen.or.jp/kikin/tabid288.html

助成を希望される方へ
https://www.kasen.or.jp/kikin/tabid290.html

お問い合わせ
公益財団法人 河川財団
基金事業部（担当：福濱（ふくはま）、益田（ますだ）、野海（のうみ）、近藤（こんどう））
電話：03-5847-8303（月～金　9:15～17:45）
E-mail:kikin-toi@kasen.or.jp

はじめての 河 川 教 育 に最適

河川基金助成 学校部門

河川教育とりくみ支援

はじめて「河川教育」にとりくむ学校にも、とりくみを検討中の学校にも、さまざまなとりくみ状況・段階にあわせて活用できる助成金です。

河川教育

河川基金では、学校のいろいろな教科や単元にとりいれることができ、教科の横断・連携した学びやアクティブ・ラーニングのテーマとしても有効な、川や水を題材・教材とした学習や川や水辺での体験学習を「河川教育」として推奨しています。

河川教育とりくみ支援 概要

- ●助成区分:河川基金助成 学校部門　河川教育とりくみ支援
- ●対象:小学校・中学校・義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校等
- ●テーマ:次年度、河川基金学校部門の「単学年」「複数学年」に申請することを目指し、河川・水教育へとりくむ準備のために必要な諸活動に対し支援を行います。
- ●対象活動期間:令和6年6月～令和7年3月末日
- ●助成金:10万円

※河川基金助成募集は、毎年秋（10月1日～11月15日）に実施していますが、「河川教育とりくみ支援」は、新学年・新学期からの川や水を題材・教材にした教育にとりくむ準備や検討をされる学校に向け春期にも助成金の追加募集を行っています。

助成の活用例

- ●学習環境の整備…河川教育に必要な教材やライフジャケットなど器具・備品の準備
- ●学校教員の研修等…川や水辺の事前調査、体験活動の試行、他校での実践の視察、研修会・発表会や講演会などへの参加、関連する資格の取得
- ●支援体制の整備…地域の関係機関、専門家や市民団体等との連携強化
- ●教育課程の整備…河川教育をとりいれたカリキュラム、指導計画、単元・教材等の開発検討のための資料収集・調査

河川教育とりくみ支援 申請方法

河川財団のホームページから申請。

https://www.kasen.or.jp/kikin/tabid290.html

①「申請書」をWeb申請手続きシステムにて入力してください。
※メール、郵送、持参での申請書受け付けはいたしません。
②「申請書類ー添付書類」　下記の必要書類のExcel書式をダウンロードして記入。記入後、手続きシステムにアップロードしてください。
・審査項目【河川教育とりくみ支援】
・必要経費【学校部門】

●河川教育とりくみ支援の申請は連続2回までとなります。河川教育とりくみ支援の助成を受けた次年度は河川基金「単学年」「複数学年」の申請を行ってください。（なお「河川教育とりくみ支援」の採択は、次年度の「単学年」「複数学年」の助成採択を確約するものではなく、申請の内容によってはご希望に添えない場合があります）
●令和5年度に河川教育とりくみ支援に採択された学校で、河川教育の実践への移行に課題が残るなどやむを得ず引き続き河川教育とりくみ支援に申請する場合は、継続の理由や課題等を申請書に記載してください。

河川教育とりくみ支援 助成の流れ

募集	募集期間 令和6年4月1日（月）～30日（火）
結果	採択通知発送（郵送）　令和6年5月末頃（予定）
活動期間	令和6年6月～令和7年3月末日（予定）
次年度 助成募集	令和6年10月1日（火）～11月15日（金）（予定） 学校部門「単学年」または「複数学年」にご応募ください!
発表会	令和7年2月 東京にて開催予定（令和5年度助成校の発表）。ぜひご参加ください!! ※「河川教育とりくみ支援」の助成を受けている場合は、旅費・交通費の支援があります。
報告	令和7年4月30日までに活動成果と決算報告書を提出 ※助成採択校には別途詳細をお知らせします。
助成金	令和7年7月頃（予定）　（完了払いをご希望の方） ※前金払いをご希望の方は令和6年6月～7月にお振込み予定

河川教育とりくみ支援　採択校の事例

全学年をつなげた系統的なカリキュラムの開発

対馬市立仁田小学校（長崎県）

全学年をつなげた系統的なカリキュラムの開発をめざし、校歌にも歌われる仁田川を中心にした学びを「河川教育」として本格的に導入しようと考えました。1、2学年の生活科では網や釣り竿を用意して仁田川の「生き物探し」をしたり、地区資源保全協議会の協力を得てアユを捕ったりしました。従来から地域の方々と協働して仁田川での学びを行ってきましたが、これをさらにネットワーク化して教職員の異動に関わらず持続的な河川教育ができるような基礎作りをしていきたいと考えます。5、6学年の総合的な学習の時間では「稲作り」を実施しましたが、農協の方々の指導を受けながら田植えから秋の稲刈りまで行いました。田んぼの水は仁田川から引いていますが、川にいるツシマアマガエルやニホンアマガエルが田んぼにもいることに改めて気づきます。体験的な学習を系統的に実践することで、子どもたちが仁田川に関心をもち、川に生息する生き物や、川の水を使った稲作や畑作など、すべてが関連していることを理解し、川を守ろうとする気持ちにつながるものと考えています。

「河川教育」を通して自ら課題解決できる子どもに

帯広市立緑丘小学校（北海道）

身近にある河川（ウツベツ川・札内川）に子どもたちが目を向け、自然環境の保全のために社会の一員としてどのように向き合っていくのかを考えられるようになってほしいと考え、前年度の「河川教育とりくみ支援」助成を受けて「河川教育」導入の準備を進めてきました。しかし本格導入のためには、環境の整備はもちろん、指導者の知識や指導法の研究、関係機関とのつながりがもっと必要だと実感し、もう1年、「とりくみ支援」を活用してさらに計画的な準備をしたいと考えました。「河川教育」を通して子どもたちが自ら課題を見つけ、自分なりの解決策を模索し実践しようとする態度や意欲を養えるように、また、学んだことを学校内だけでなく地域社会に発信することで、地域の問題として考える素地をつくることをめざしました。新型コロナ感染拡大の影響で校外学習ができなかった時期は、帯広市役所上下水道課による出前講座を活用し、水道水の学習から間接的に河川について学びました。学校の隣を流れるウツベツ川は見た目にも、教室でのキットを使った水質検査でも少し汚れていたので、安全でおいしい水を提供するきれいな札内川につながっていることに子どもたちは実感が持てないようでした。しかし実際にウツベツ川に入っての生物採取では意外と多くの生き物が生息していることに驚いていました。イワナやヤマメなども確認され、魚が棲めるきれいな川にするにはどうすればよいか、子どもたちは自分たちの課題として考えはじめています。

「河川教育」で教科を横断する探究的な学習

学校法人いいづな学園 グリーン・ヒルズ中学校（長野県）

本校では開校以来、教科横断的で探究的な学習をカリキュラムの中心に据えていますが、そこに「河川教育」を取り入れたいと考えました。座学ではなく体験的な学びにより、子どもたちが本校の立地する飯綱高原周辺の河川や湖沼を含めた自然環境のよさに気づき、また防災意識が養われることをめざしました。具体的には飯縄山を源流とする浅川と千曲川の治水を題材とする学習計画の策定ですが、「河川教育」にとりくむ教職員が、人の暮らしと川のよりよい関係を学び、河川活動のリスクを知るために、ダム見学とアウトドアスクール受講による研修を実施しました。浅川ダムと浅川排水機場の見学では、河川事務所の協力を得て、千曲川堤防決壊による被害など長年にわたる治水の課題を理解しました。また、小・中学校の教職員合同での野外研修では、河川での体験活動の中で、ライフジャケットの装着の仕方やスローロープの投げ方など道具の扱い方や、川の流れの見方や危険性について学び、リスクマネージメントスキルの向上を図りました。この体験をどう教科に活かし、さらに教科の枠組みをこえた多角的視野を持つ学習につなげるかが今後の課題です。

河川基金助成　学校部門　採択校の事例

多摩川学習は「つながり」を生む河川教育

大田区立嶺町小学校（東京都）

助成区分　複数学年

学校の目の前の多摩川が教材になるというのはとてもありがたいことです。生きた教材を用いることで子どもたちも目を輝かせて活動します。インターネットや本からでも「川の勉強」はできます。プリントアウトしたものや本に書いてあることを、よく意味が分からないまま見栄えよく発表することもできます。しかし、自分で体験したことや、身近な生き物や人に触れることで、調べたり、考えたりしてこそ得られる学びというものもあると思います。地域の資源を活用することで郷土愛が育まれると思います。

川の可能性は「つながり」だと思います。生き物同士のつながり、生き物と人とのつながり、歴史のつながり、地域のつながりなど、「つながり」を子どもたちが自分で発見し、探究することで学びの達成感が得られます。川の生き物調べをしていくと、子どもだけでは解決できない「壁」にぶち当たります。自分で実験や観察を行って検証する子どももいます。さらにそれが正しいかを博物館に手紙を書いて問い合わせをする子どももいました。発表が苦手な子どもが、シンポジウムで発表者となり自信をつけたりもしました。

多摩川学習は教育活動であるため、発達段階に応じて毎年リトライを続けながら活動しています。単年度で完結せず、複数年続けます。自分で学習したことを毎年まとめたり発信したりしながら、学年が上がるごとに深めていきます。次の学年で何をやるのか、子どもたちは期待感を持って進級します。表現力や伝えることの工夫を凝らしながらレベルアップすることができます。他の教科の学習についても関心や意欲が高くなっていることを実感します。

河川教育という視点で繋ぐ全学年を通した活動

帯広市立豊成小学校（北海道）

助成区分　複数学年　文部科学大臣賞受賞

日高の湧水を源に学校の西側を流れる、学校専用のビオトープともいえる幅2mほどの「機関庫の川」を学習活動のフィールドとして、1年生から6年生までの全学年を対象に河川教育に取り組んでいます。児童が自分たちの生活と身近な自然とのつながりを実感し、この恵まれた環境を守ろうとする見方や考え方を育むことを意識した活動を進めています。

3年生では、NPO等地域の方々に協力をいただき、外来種であるウチダザリガニの駆除を行います。以前は、捕えたザリガニは川には戻せず廃棄していました。外来種とはいえ命を廃棄する行為は道徳的にどうなのか?と教師の間でも議論になり、子どもたちから「ザリガニが可哀想」という意見もありました。悩んでいた最中、帯広北高校の理科の先生からザリガニ堆肥として活用する方法を教えていただきました。今までは廃棄していたザリガニで6年生が堆肥を作ります。命を無駄にしないという繋がった活動になりました。

本校の河川教育が引き継がれている大きな要因は、毎年度の教育課程に位置付けられていることです。学校の歴史かもしれませんが、教師の中で「行うことが当たり前」という雰囲気が既にあります。子どもたちも同じで「来年になったら○○をするんだ」という意識が芽生えています。家庭でも「6年生になったらザリガニ堆肥を作るよ」と話がされていることが分かります。

河川基金を知ったのは3年前。河川基金の申請がきっかけで、学校の体験活動やしくみについて整理ができたことはよい機会でした。「キャリア教育」の一つとして大切にしてきた「川の学習」。河川教育という視点で整理する時、水という観点で繋いでいき、全学年通した活動が出来上がりました。河川基金で繋がることができたたくさんのご縁も、よかったことの一つです。